

令和 2 年 6 月 11 日現在

機関番号：32711

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K01697

研究課題名(和文)国際オリンピック委員会会長辞任後のクーベルタンの言動から見えるオリンピズム

研究課題名(英文)Olympism seen from Coubertin's words and actions after the resignation of the International Olympic Committee President

研究代表者

和田 浩一(WADA, Koichi)

フェリス女学院大学・国際交流学部・教授

研究者番号：20309438

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、近代オリンピックの創始者ピエール・ド・クーベルタン(1863-1937年)が国際オリンピック委員会(IOC)会長辞任後に結成した万国教育連盟について、(1)その役員構成と連盟が企画した国際会議の内容、クーベルタンの教育思想の3点を整理し、(2)(1)の結果から、万国教育連盟の活動がオリンピズムの現代的解釈の糸口となることの妥当性を裏づけ、(3)万国教育連盟におけるクーベルタンの活動と思想の特徴を、IOC在籍時のそれらと比較しながら明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1991年にオリンピック・ムーブメントを支える根本的な教育理念であると定義されたオリンピズムは、国際オリンピック委員会(IOC)会長辞任後のクーベルタンによる行動と思想とが問い直されることなく、これまで無批判に扱われてきた。2020年東京大会の延期決定を経て、「オリンピックとは何か」が強く問われる中、IOC会長辞任直後に創設された万国教育連盟におけるクーベルタンの言動は、オリンピックの枠組みでは十分に捉え切れていないオリンピズムの内実を示してくれるものと期待できる。

研究成果の概要(英文)：In this study, we examined the following three points with regard to the Universal Educational Union established by Pierre de Coubertin, the founder of the modern Olympic Games, right after his resignation of the president of the International Olympic Committee (IOC). (1) Board members of the Universal Educational Union, the contents of the international conferences organized by the union, and the educational thought of Coubertin, (2) the validity of the activities by the union as a clue to interpret the Olympism from a modern point of view, and (3) characteristics of Coubertin's activities and thought in the union in contrast with those of the IOC era.

研究分野：体育・スポーツ史

キーワード：オリンピック クーベルタン オリンピズム IOC 万国教育連盟 ムーブメント

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

国際オリンピック委員会 (IOC) の憲法ともいえる「オリンピック憲章」には、オリンピック大会はオリンピック・ムーブメントの頂点であり、オリムピズムはこのムーブメントを支える根本的な教育理念であると記されている。しかし、この定義が初めて示された 1991 年以降、オリムピズムは約 30 年に渡り、創始者ピエール・ド・クーベルタン (Pierre de Coubertin, 1863-1937) による行動と思想とを問い直す根源的な議論を抜きにしたまま、無批判に扱われてきた。

研究代表者の和田は、IOC 委員を含む当時のオリムピック関係者とクーベルタンとの間に、オリムピズムへの認識にズレがあったことを明らかにし、その原因の手がかりを IOC 会長辞任直後に結成した万国教育連盟 (Union Pédagogique Universelle) における彼の言説に求めてきた<sup>\*1\*</sup>。しかし、これら一連の研究において、万国教育連盟の分析には初年度の年次報告書『万国教育連盟報』I 巻 ([1926]) しか用いられておらず、万国教育連盟の活動と思想の全体を正確に跡づけるまでには至っていなかった。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、近代オリンピックの創始者ピエール・ド・クーベルタンが IOC 会長辞任後に結成した万国教育連盟における活動と思想とに注目し、オリンピックの枠組みでは十分に捉えられていないオリムピズムの内実を明らかにすることである。

### 3. 研究の方法

本研究は 3 年の期間で、以下の 3 点を研究課題として設定した。

#### (1) 万国教育連盟の役員構成と活動内容、クーベルタンの教育思想の整理

万国教育連盟の役員構成、連盟が企画した国際会議の内容、諸活動の基盤となったクーベルタンの教育思想の 3 点を、年次報告書『万国教育連盟報』および IOC アーカイブス (ローザンヌ) 所蔵の「万国教育連盟関係ファイル」に収められた史料から整理する。

#### (2) 万国教育連盟の活動がオリムピズムの現代的解釈の糸口となることの妥当性の検討

(1) で取り上げた 3 つの視点から、IOC との共通点やその力点の配分の違いなどを比較考察し、万国教育連盟と IOC との連続性・補完性を説明する。IOC 側の主な史料は機関誌 *Revue Olympique* とオリンピック・コンGRESの報告書である。

#### (3) 万国教育連盟におけるクーベルタンの活動と思想の特徴の検討

(1)(2) の結果をもとに、万国教育連盟にはあって IOC にはなかった活動・思想や、両組織が共通して取り上げた活動・思想についてはその違いなどを整理し、IOC 在籍時には十分に説明されなかったオリムピズムの概念的要素を明らかにする。

### 4. 研究成果

本研究の主史料である『万国教育連盟報 (Union Pédagogique Universelle)』は、IOC オリムピック研究所内のアーカイブスに所蔵されている。全部で 4 巻あり、各巻 22 ページの冊子体で年に 1 回発行されていた。各巻とも発行年の記載はないが、I 巻は 1925-1926 年、II 巻は 1926-1927 年、III 巻は 1927-1928 年の活動が報告されている。「全体報告および結論」と題された IV 巻は、1929 年までの全期間の活動がまとめて報告されている。

『万国教育連盟報』I 巻の冒頭には、万国教育連盟結成の背景と目的とを綴った「万国教育連盟の結成時に放送されたラジオメッセージ (1925 年 11 月 15 日)」が置かれており、万国教育連盟の実質的な活動期間は、1925 年 11 月から 1929 年末頃までの約 4 年間であった。

#### (1) 万国教育連盟の役員構成と活動内容、教育思想の整理

##### 万国教育連盟の役員構成

万国教育連盟の役員構成の全体像は、『万国教育連盟報』全 4 巻にも「万国教育連盟関連ファイル」に収められた諸書類にも示されていない。わずかに、1927 年 4 月にアテネ大学で開かれた哲学会議の内容を報告する『万国教育連盟報』II 巻 (p. 10.) において、会長クーベルタンとギリシャ公教育省局長クリサフィスが、万国教育連盟の役員会を代表して参加したと記されているのみである。

各巻とも、本文が始まる直前のページ ( 標題紙から 3 ページ目、全体の 4 ページ目に相当 ) には、事務局長としてマニャ (G. -E. MAGNAT、職業等は不明) の名前が掲載され、万国教育連盟への連絡の宛先としてジュネーブにある彼の住所が示されている。したがって、万国教育連盟の役員は会長クーベルタン ( フランス ) と理事クリサフィス ( ギリシャ ) 、事務局長マニャ ( スイス ) の 3 名で構成されていたと推察される。

一方、1924 年のオリンピック大会 ( パリ ) への参加は 44 カ国あり<sup>\*3</sup>、クーベルタンが IOC 会長を辞任した 1925 年における IOC は、46 カ国・66 名の委員で構成されていた<sup>\*4</sup>。つまり、万国教育連盟は IOC とは比較にならないほど小さな組織であった。

万国教育連盟が企画した国際会議の内容

万国教育連盟の主な活動は、1926年から1927年にかけて企画された3つの国際会議であり、これらの内容は『万国教育連盟報』で報告されている。

#### 1) ローザンヌ会議 (1926年9月14-17日)

「現代都市の教育学的役割」をテーマとするこの会議は、レマン湖畔に建つウシー城で開かれた。11か国(ドイツ、ギリシャ、チェコスロバキア、アメリカ、オランダ、ユーゴスラビア、日本、フィンランド、スイス、ペルー、イギリス)から、大学や公教育省、学術組織、政府機関、地方行政機関、国際労働事務局、国際女性評議会、学生組織の関係者、および教育・労働問題に関わる個人資格者の約40名が参加した。

会議は、1)一般教養の入口：大衆大学、2)スポーツ権：古代ギムナジウムの復興、3)道徳的環境、4)大衆芸術の4本の柱で構成された。この会議の目的は、「時間的な余裕や手段を持たず、知性的かつより上質な生活を営むことができない成人」(『万国教育連盟報』IV巻、[1929]、p. 16.) すなわち労働者である中等・高等教育を受けられなかった一般成人市民に、教育の機会をどのように保証していくのかを議論することだった。クーベルタンによれば、一般成人市民による一般教養の学びの機会が都市が保証すべきものであり、その要点は知の領域全体のエッセンスを俯瞰するカリキュラムを準備することであるという。一般教養の中にはスポーツが含まれており、すべての成人市民にはスポーツを無償で行う権利があると説明されている(同I巻、[1926]、pp. 11-21.)。これらを実現するために、大衆大学の設置と体育施設の近代的な刷新が提案され、会議の1年後には、これらの基本方針を示す「大衆大学憲章」と『古代ギムナジウム』規約』が示された(同II巻、[1927]、pp. 13-16.)。

#### 2) エクサン・プロヴァンス会議 (1926年予定 1927年に延期 1928年に延期 中止)

「美学」をテーマとする国際会議は当初、1926年10月にフランスのエクサン・プロヴァンスで予定されていたが、最終的には中止となった。その代替措置として、美学に関する論考「美学会議」が『万国教育連盟報』III巻([1928]、pp. 9-14.)に掲載された。論考は「一般原則」と「教育[カリキュラム]」、「ユーリトミー(全体的な調和)」の3点に分けて展開され、大衆教育における「美学」「芸術」の意味論や方法論を哲学的に検討するものであった。

#### 3) アテネ会議 (1927年4月)

「哲学」をテーマにした国際会議が、1927年4月にアテネ大学で開催された。参加者はアテネ大学の哲学学部教授6名、薬学部教授1名、神学部教授1名、万国教育連盟側から会長クーベルタンと理事クリサフィスの計10名であり、40名余りの参加者を集めたローザンヌ会議と比して規模の小さな会議だった。

クーベルタンは当初からこのアテネ会議を、「万国教育連盟の全体プログラムに適合した哲学の教育プログラムを練り上げる」ことに特化した会議として準備していた(『万国教育連盟報』I巻、[1926]、p. 22.)。したがって、これは人が集まらなかった国際会議なのではなく、大衆大学の教育カリキュラムに哲学をどのように位置づけるのかを議論した、少数精鋭の専門家集団による国際会議であった。

クーベルタンは、哲学の概念は現実の世界と断絶した抽象的な概念ではないと述べた上で、社会の中で「問題を提起しこれを論じるという哲学」の方法論自体が、「道具としての知識」すなわち「批判的センス」を磨くことになり、これは大衆大学の教育目的に合致すると結論づけた(同II巻、[1927]、pp. 10-13.)。

諸活動の基盤となったクーベルタンの教育思想

とを踏まえ、次の2点をクーベルタンの教育思想として整理しておきたい。

1) 万国教育連盟の活動の中でクーベルタンが対象としたのは、労働者すなわち中等・高等教育を受けられなかった一般成人市民であった。彼はスポーツを含む一般教養の公平な授与の保証は都市がなすべきであると考え、大衆大学の設置と体育施設の近代的な刷新を提案した。

2) 「現代都市(の教育学的役割)」と「美学」、「哲学」に特化した国際会議を企画するなど、クーベルタンの教育思想において、この3つは重要なテーマであった。

(2) 万国教育連盟の活動がオリンピズムの現代的解釈の糸口となることの妥当性

以下の3点の事実により、万国教育連盟の活動をオリンピズムの現代的解釈の糸口とすることは妥当であると考えられる。

1) クーベルタンは『万国教育連盟報』I巻の冒頭(p.5.)で連盟の目的を説明する際、自らを「オリンピック競技会の復興者」と呼び、万国教育連盟とオリンピック・ムーブメントとの連続性を示唆した。

2) 万国教育連盟の活動において、クーベルタンは「美学」に重要な位置を与えていた。国際会議の企画がその一例であるし、『万国教育連盟報』全4巻に占める「美学」に関するテキストの

分量が約 20%に上ることも、その証左となる<sup>5</sup>。一方、オリンピズムもまた、「芸術」に重要な位置を与えていた。1906 年にはパリで、「芸術とスポーツ、文学の結合」をテーマにしたオリンピック・コンGRESSが開かれ、その成果は 1912 年のストックホルム大会から始まった芸術競技に結実した。さらに、クーベルタンの手による「スポーツと芸術」に関する 40 編あまりの論考が、IOC の機関誌 *Revue Olympique* に掲載された<sup>6</sup>。したがって、万国教育連盟で取り上げられた美学に関する議論は、オリンピックにおける「スポーツと芸術」論を土台にして展開されたものだったと解釈できる。

3) 万国教育連盟が国際会議で取り上げたテーマである「現代都市の教育学的役割」は、オリンピック・ムーブメントにおいてすでに、研究の対象として位置づけられていた。クーベルタンは『万国教育連盟報』IV 巻 ([1929]、p. 22.) において、「近代オリンピズムは 1911 年から、このテーマ(美的感性を育む都市計画)についての模索に着手した」とはっきり証言している。これは、1906 年のオリンピック・コンGRESSへの参加者でもあった建築家たちが 1911 年に主催した国際建築コンクールを IOC が後援したことを指している。クーベルタンはこのコンクールのテーマである「現代オリンピア」と題する論考を、6 回シリーズで *Revue Olympique* に掲載するとともに(1909-1910 年) その結果を同誌で報告したのだった(1911 年 8 月)

「芸術・美学」と「現代都市の教育学的役割」の議論は、オリンピック・ムーブメントの流れに沿って展開された万国教育連盟の主要な活動だったと見なすことができる。

### (3) 万国教育連盟におけるクーベルタンの活動と思想の特徴

万国教育連盟におけるクーベルタンの活動と思想の特徴を、上述の国際会議のテーマ(現代都市の教育学的役割、美学、哲学)に触れつつ、IOC のそれらと比較しながら整理する。

まずは、両者による活動の対象者を比較する。IOC の中心的な活動はオリンピック競技会の開催であり、その主な対象者は若い競技者である。これに対し、万国教育連盟がターゲットとしたのは労働者、すなわち一般成人市民だった。IOC が若いアスリートを対象とした「オリンピック競技会という制度の開催」を現代都市に求めたのに対し、万国教育連盟は一般成人市民のために「大衆大学の設置と体育施設の刷新」を現代都市に求めた。IOC も万国教育連盟もともに、現代都市に教育運動の担い手となることを望んだが、その対象者と内容には明確な違いがあった。

2 つめの視点は、IOC が主催したオリンピック・コンGRESSのテーマと万国教育連盟が企画した国際会議のテーマとの比較である。オリンピック・コンGRESSは、オリンピック・ムーブメントの推進を目的に不定期に開催された学術会議であり、オリンピック競技会という「制度」をオリンピズムという「思想」で支えるという構想のもとに、会長クーベルタンのイニシアチブによって企画・運営された<sup>7</sup>。オリンピック・コンGRESSで取り上げられた具体的なテーマは、「身体訓練と衛生・教育学・歴史」(1897 年)、「スポーツと体育に関する諸問題」(1905)、「芸術と文学とスポーツの結合」(1906 年)、「スポーツ心理学とスポーツ生理学」(1913 年)、「オリンピック・プログラムと参加資格」(1914、1921 年)、「オリンピック教育学」(1925 年)であった。

体育・スポーツ以外でテーマに取り上げられた学術分野は、衛生と教育学、歴史、芸術、文学、心理学、生理学である。これらのうち「教育学」および「芸術・文学」が万国教育連盟による国際会議のテーマと重なっていることが分かる。さらに「歴史」は、大衆大学のカリキュラムの指針として万国教育連盟が示した「基本憲章」全 9 条中の 3 条で取り上げられており(『万国教育連盟報』I 巻、[1926]、p. 7.) これも両組織が見据えた共通のテーマだったといえる。一方、万国教育連盟が国際会議のテーマとして取り上げた「哲学」は、オリンピック・コンGRESSのテーマには見当たらず、したがってこれは IOC が明示しなかった万国教育連盟に固有の教育テーマであった。

3 点目として議論しておきたいことは、例え IOC と万国教育連盟の共通テーマであっても、その質は異なっていたことである。例えば「教育学」を取り上げてみよう。1897 年のオリンピック・コンGRESSで議論された「教育学」の中身とは、具体的には身体訓練(exercices physiques)を教育学の枠組みで理解するための視点の検討であり、例えばその道徳的影響、性格形成や個性の発達への影響、中学・高校での身体訓練における生徒の自主性などがこれに該当した<sup>8</sup>。これに対し、万国教育連盟における教育学とは、大衆大学の設置を方向付ける知識教育の指針とカリキュラムとを視野に入れたものであった。クーベルタンは大衆大学の教育課程の指針として 9 条からなる「基本憲章」と、カリキュラムで取り上げるべき知識のリストとして「10 本のたいまつ」<sup>9</sup>とを明示した(『万国教育連盟報』I 巻、[1926]、pp. 5-7, 9-10.)

「芸術・美学」の内容も、両組織の間で相違が見られる。1906 年のオリンピック・コンGRESSの目的は、「芸術と文学はいかなる方法や形式化において、近代オリンピアドの祭典に参加でき、さらにはスポーツの実践と結びついてその恩恵に浴するとともに、これを高貴なものにできるのか」を議論することであった<sup>10</sup>。つまり、芸術をオリンピック・ムーブメントに組み込む具体的な方法が議題であった。これに対し、『万国教育連盟報』(III 巻、[1928]、pp. 9-14.) では、「美の形成を準備する一般的な教育学」や「美学とユーリトミー(全体的な調和)の関係」、「美的感覚と教養」、「美学に関する批判的精神」など、美学の教育哲学とでもいべき内容が論じられた。

クーベルタンは近代オリンピック復興 40 年を記念する式典でのスピーチで、「IOC は増加する一方の技術的な役割に巻き込まれ、1897 年のオリンピック・ kongress に端を発するその教育学的事業を追求することができなかった」<sup>\*11</sup> と振り返っている。IOC 会長辞任直後に結成した万国教育連盟は、IOC が取り上げた「教育学」と「芸術」を、対象者や内容の面で大きく進化・深化させるとともに、新たに「哲学」を議論の俎上に載せ、一般成人市民の教養を育む仕組みを「現代都市」という枠組みの中で具体的に提案した。これはまさに IOC が追求できなかった教育学的事業であるといえる。

新型コロナウイルスの世界的な流行を受け、2020 年東京大会は翌年に延期となった。その開催も危ぶまれる今、オリンピックとは何か、言い換えれば、オリンピズムとは何かを根本的に問うことが、国際社会の中で求められている。万国教育連盟におけるクーベルタンの言動は、IOC がまだ十分に説明し切れていないオリンピズムの概念的要素を映し出している鏡であると見なすことができよう。

#### 引用文献

- \*1 . 和田浩一「クーベルタンが考えたオリンピズム」『体育史研究』第 33 号、2016 年、pp. 33-39.
- \*2 . 和田浩一・荒牧亜衣「2020 年東京オリンピック・パラリンピック大会を見据えたスポーツ政策の理念的モデルの検討：IOC 会長辞任直後のピエール・ド・クーベルタンによる教育改革の分析を通して」『2014 年度笹川スポーツ研究助成研究成果報告書』、2015 年、pp. 29-36.
- \*3 . IOC の公式ウェブサイトによる (<https://www.olympic.org/fr/paris-1924>): 2020 年 6 月 2 日閲覧。
- \*4 . *1894-1994, un siècle du Comité international olympique : l'idée, les présidents, l'œuvre*. volume II, Lausanne : Comité International Olympique, 1995, pp. 216-220.
- \*5 . 和田浩一「IOC 会長辞任直後に結成した万国教育連盟におけるピエール・ド・クーベルタンによる芸術と美の展開」日本体育学会第 68 回大会発表配付資料 (2016 年 8 月 24 日)
- \*6 . 和田浩一「オリンピズムにおける文化・芸術：クーベルタンの理想」第 40 回日本オリンピック・アカデミー・セッション基調講演配付資料 (2017 年 12 月 16 日) / 和田浩一「筋肉と精神の『偉大な結婚』 近代オリンピックにおけるスポーツと芸術の結合」『現代スポーツ評論』35、2016 年、pp. 46-58.
- \*7 . 和田浩一「近代オリンピックの創出とクーベルタンのオリンピズム」小路田泰直・井上洋一・石坂友司編著『ニッポンのオリンピック』青弓社、2018 年、p. 47.
- \*8 . Coubertin, Pierre de. *Mémoires olympiques*. Lausanne : B.I.P.S, 1931, pp. 44-45.
- \*9 . 「10 本のたいまつ」で示された 10 領域の知識は、以下のとおり。1) 個人の生存そのものを規定する 4 領域の知識：天文学・地質学・歴史学・生物学、2) 人間の精神的・道徳的な発達に関わる 3 領域の知識：数学・美学・哲学、3) 人間の社会生活を支配する 3 領域の知識：経済・法律・民俗学および言語学。
- \*10 . Lettre d'invitation. Comité International Olympique (ed.). *Pierre de Coubertin : Textes Choisis*. tome II, Zürich : Weidmann, 1986, p. 482.
- \*11 . Coubertin, Pierre de. « Quarante années d'Olympisme 1894-1934 ». Publication de l'Association des Amitiés Gréco-Suisses et du Bureau International de Pédagogie Sportive, 1934, p. 15.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 和田 浩一、小石原 美保
2. 発表標題 オリンピズムの形成過程における「芸術におけるスポーツ展」（1884-1895年、パリ）の意味：展示作品に見えるスポーツ概念の検討を通して
3. 学会等名 第13回東北アジア体育・スポーツ史学会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 和田 浩一
2. 発表標題 ピエール・ド・クーベルタンがIOC会長辞任直後に設立した万国教育連盟の委員構成と関係外部組織
3. 学会等名 日本体育学会第70回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 WADA, Koichi
2. 発表標題 Why is Pierre de Coubertin's vision necessary to discuss the Olympic Movement in Asia ?
3. 学会等名 2019 International Olympic Colloquium（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 WADA, Koichi
2. 発表標題 Jigoro Kano et l'olympisme
3. 学会等名 Conference au CLA de l'Universite de Franche-Comte a l'invitation du CEROU（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 和田 浩一
2. 発表標題 ピエール・ド・クーベルタンが万国教育連盟で企画・実施した諸会議とオリンピック
3. 学会等名 日本体育学会第69回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 和田 浩一
2. 発表標題 IOC会長辞任直後に結成した万国教育連盟におけるピエール・ド・クーベルタンによる芸術と美の展開
3. 学会等名 日本体育学会第68回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 和田 浩一
2. 発表標題 オリンピックにおける文化・芸術：クーベルタンの理想
3. 学会等名 第40回JOA（日本オリンピック・アカデミー）セッション・基調講演
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 後藤光将（編著）、和田浩一、真田久、佐野慎輔、舛本直文、荒牧亜衣、安藤佳代子、高峰修（著）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 198
3. 書名 オリンピック・パラリンピックを学ぶ	

1. 著者名 坂上康博、中房敏朗、石井昌幸、高嶋航（編著）、和田浩一、有賀育敏、岩瀬裕子、功刀俊雄、姉川雄大、山崎信一、岩本和久、川島浩平、窪田暁、松岡秀明、松尾俊輔、藤川隆男、川本真浩、佐藤尚平、Stefan Hubner、金誠（著）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 一色出版	5. 総ページ数 653
3. 書名 スポーツの世界史	

1. 著者名 飯田貴子、熊安喜美恵、來田享子（編著）、小石原美保ほか（著）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 224
3. 書名 よくわかるスポーツとジェンダー	

1. 著者名 小路田 泰直、井上 洋一、石坂 友司（編著）、和田浩一、小石原美保、井上俊、坂上康博、内田隆三、阿部潔、菊幸一（著）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 264
3. 書名 ニッポン のオリンピック	

1. 著者名 友添秀則（編著）、和田浩一ほか（著）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 202
3. 書名 よくわかるスポーツ倫理学	

〔産業財産権〕



〔その他〕

和田 浩一「クーベルタンの思想からオリンピック・パラリンピック教育を考える」、東京都教育委員会平成29年度オリンピック・パラリンピック教育推進のための教員研修会、2017.8.1  
 和田 浩一「オリンピックってなに？ オリンピズムってなに？ クーベルタンが答えます」、日本オリンピック委員会オリンピックアン研修会、2018.3.17  
 和田浩一「（講演）東京2020大会を目前にしたオリンピック・パラリンピック教育とその後のレガシー」平成30年度オリンピック・パラリンピック教育アワード校およびパラリンピック競技応援校実践報告会、2018.9.20  
 和田浩一「（講演）クーベルタンの目に映るオリンピック・パラリンピック教育と国際感覚」平成30年度教育研究員教育課題（オリンピック・パラリンピック教育）部会研究発表会、2019.2.1  
 和田浩一「オリンピックとパラリンピックが大切にしていること」浜松市立伊目小学校生徒向け講演、2019.6.10  
 和田浩一「気軽にオリンピック！クーベルタンの考えたオリンピズムって何？」日本パラリンピアンズ協会勉強会、2019.8.2  
 和田浩一「オリンピック・パラリンピック教育と保育園：クーベルタンと一緒に考えてみましょう」品川区子ども未来部保育課職場企画研修会講演、2019.11.11

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	小石原 美保  (Koishihara Miho)		オリンピック研究センター・アーカイブスでの史料収集、および芸術に関するクーベルタンの思想と時代背景の分析を担当。